

## 高精細 熊皮御影について

親鸞聖人の御影は、鏡御影、安城御影、熊皮御影などで知られている。本図は、親鸞聖人が首に帽子を巻き袈裟を着け、両手で数珠をまさぐり持ち、高麗縁の上畳に獣皮を敷いて坐していることから、熊皮御影として知られている。前には杖が横たえられている。図の親鸞聖人のご表情、お姿からは、精悍さや伝道への熱意・意志が感じられる。

図の制作は、南北朝期の頃と思われるが、近年、さらに下がって室町時代の作画とみる意見が出されている。技法は伝統的な高僧像の技法に従っているといわれ、本図は天地に円文と雲文と配し、連続する絹に描く描表具としている。

画面右上には色紙形に七言四句の偈「行者宿報設女犯 我成玉女身被犯 一生之間能莊嚴 臨終引導生極楽」がある。これは、親鸞聖人が六角堂に百日間の参籠に入り、九十五日目に救世観音が夢に現れて告げられた偈という。

外題に「善信房御影（四句文尊円親王繪浄賀法橋）」とある。偈は青蓮院流尊円で、絵は浄賀とされる。浄賀は本願寺第三代覚如上人が永仁3年（1295）に「善信上人親鸞伝絵」を描かせた絵師で、その画系は康楽寺派と呼ばれて真宗の絵伝・祖師像を描いたとされる。ともに南北朝期のはじめ頃の人物であるが、この伝承には確たるところがないとされる。

私たちはこのたびの高精細画像による熊皮御影によって、宗祖のご表情、お姿を間近に拝することとなった。お顔に刻まれた深いお皺には、京都から越後へ流罪され、赦免後に常陸へ、20年余にわたる常陸を中心として各地にみ足を運び、心身を駆使して伝道に尽くされたご苦勞をうかがうことができる。

今日の私たちがさざざまに着飾ることを日常化し、「撰取不捨の真言、超世希有の正法」の聞思を希薄化しているなかで、熊皮御影は、浄土真宗のみ教えを伝えることをご生涯とされた親鸞聖人との希有な出遇いとなるであろう。

本願寺史料研究所所長・龍谷大学前学長 赤松 徹真